
中国サツマイモ視察記(3)

～「日中甘藷文化―表裏一体説～

サツマイモ資料館 館長 山田英次

8. 済南より徐州へ(8月26日)

26日は日曜日ということで、どこでも休みで甘藷関係の視察はできないので、農業科学院で情報交換をしようということになった。とくに、日本の甘藷事情について聞かせてくれないかと要請があり、午前中は農業科学院情報資料研究所2階で、こちら側の説明を主とした交流会が行なわれた。

団員6名が各自の立場から、日本の甘藷情況についてそれぞれ説明したが、中国側の研究者の面々は大変熱心であった。今後の課題として、情報交換、学術的・人物的交流、食品加工研修、協力研究などを要望されたが、とにかく可能などころからお互いに協力しあった方がよいということになった。

昼食は山東省の大衆的な料理を食べてくれるので、市内の「百東レストラン」という大衆料理店に連れていかれた。そこでびっくりしたのは、料理が次から次へと出て、テーブルが皿の山となってしまった。やはりここでも、甘藷関係者ということで気をつけて、^{パースー}拔糸、春雨料理、甘でん餅の炒め物、チップスなどの甘藷料理を出してくれた。最後はもうとても箸が出せなかったが、料理のふるまいからみて、いかに私達を歓待してくれたかわかった。

午後からは列車で徐州へとむかったが、済南から徐州までの約5時間、車窓よりみた風景は、トウモロコシ、綿花、甘藷のみの広大な畑であった。とくに、甘藷は土地の悪いと

ころ(大石のゴロゴロした所、河川の脇など)につくられていたが、それでも平野一面の広大な甘藷畑を見たときは驚いてしまった。日本でもあれほどの大甘藷畑は見ることはできない。

それと面白いことを発見したのは、時々、甘藷畑にツルを刈りにきている農民の姿をみたことだった。隣の席にいた邢先生に尋ねたら、あれはブタのエサにするのだという返事だった。

9. 徐州甘藷研究センター視察(8月27日)

26日の夕方、徐州駅に着いたら、ホームまで徐州農業科学研究所の副所長さん等3名の方々が迎えに来てくれていた。徐州駅で珍しかったのは、ホームとホームをつなぐ通路の陸橋の上に人が大勢たむろしていることだった。あまりに人が多いので、どういことだと聞いたら、みんな暑くて仕様がなないので、夕涼みしているのだとのことだった。

ホテルは、駅から近くの「南郊賓館」という緑の多い落ち着いたホテルであった。徐州は、昔から軍事地理的な重要な地点で、それだけに古い歴史をもつ街であると言われた。

割り振られた小野先生の部屋のみは、隣りに小会議室付きの立派な部屋であったので、夜は自然にミーティングというかたちになった。団員6名のみでゆっくり話す機会がなかったので、いいチャンスであり、内輪のみの楽しい交流会であった。

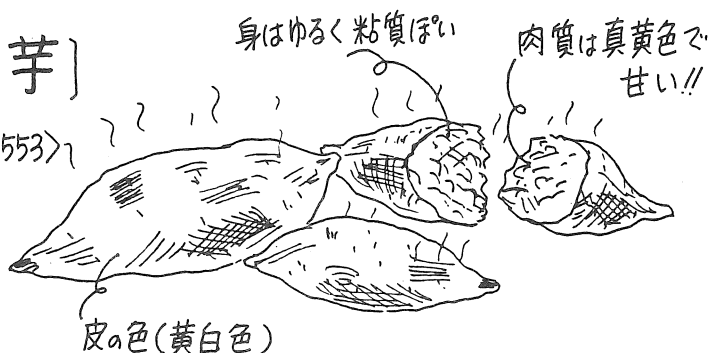
《徐州甘藷研究センターでの交流》

中国で食べた甘薯食品

全般的に、日本の調理法と同じようであるが、イモの身はゆるい。

〔焼芋〕

〈北京553〉



北京や上海などの都会では、冬場の人気スナックであると言われる。ドラム缶と土でつくった簡易やきいも機の「やきいも屋」がマチなかに出る。

中国では、焼芋のことを「烤白薯」(カオパイシュウ)と言い、品種は「北京553」が主流。北京の高級料理店の招宴の時でも、協会の方が気を使って焼芋を出してくれたが、徐州甘薯研究センターでは、どっさり焼いてくれた。又、同研究所の方が言うには、「北京553」より「徐薯34号」の方が美味しいと言われた。ただ、34号の欠点は収量が少ないと言う。

〔春雨〕

春雨(粉系という)

肉やネギといっしょに、しょう油で味付けし、いためてある



中国では、甘しょでんぷん(主に徐薯18)を、主に切干シイモよりつくる。春雨をつくる時、その太さにより、「粉系」「粉条」「粉皮」(プラスチックの板のよう)という。又、甘でんをそのまま水で固めて、コンニャク風(もち)のものをつくり、食材としてつかう。

（主な関係機関一覧）

◎〈中国農業部〉中国農業国際交流協会

副秘書長 馬四近先生

〒100026 中華人民共和国 北京市農展馆南里11号

◎北京農業大学 農学系 陸漱韻教授

中国：北京市

◎北京市農林科学院作物研究所 范垂方先生

〒100081 中国：北京市西郊板井村

◎山東省農業科学院作物研究所 副所長 陳存来先生

（甘薯研究室 副主任 王建軍先生）

山東省済南市東郊桑園路14号

◎江蘇徐州農業科学研究所 所長 李国柱先生

（〃〃 甘薯研究中心）品種資源研究室 郭小丁先生

江蘇省徐州市東郊東賀村

◎江蘇省農業科学院糧食作物研究所

甘薯研究室 主任 邱瑞鑑先生

江蘇省南京市孝陵衛

◎上海市農業科学院園芸研究所 所長 沈延松先生

〒201106 上海市北翟路3000号 （甘薯担当 郑海柔先生）

研究所の施設と甘藷研究センターはほぼ一体のものと考えられるもので、中国全土の甘藷研究の中心的役割を果たしている所であり、指導的存在である。

すなわち、中国の育種研究のメッカであり、全国のサツマイモ品種を集め、保存している。中国作物学会甘藷專業委員会もここに置かれていて、毎年一冊、中国全土の研究者の成果をのせた研究報告機関誌「中国甘藷」を発行している。

そのようなわけで、私達のサツマイモ視察の山場は、この甘藷研究センターであった。

■この「視察記」は好評裡に来号で紹介します。内容は甘藷研究情况等の紹介に始まり、日本帰国までです。ご期待ください。

徐州農業科学研究所は、市の中心部から車で約1時間の郊外にあり、その研究所内に甘藷研究センターが置かれていた。

常識法話

◆寄附行為

昔から、コトダマ（言霊）のさちおう国と言われているだけに、同文異語の用語がはびこっている。

寄附行為と言えば、お祭りの費用の一部に差出す金銭か、湾岸戦争で家財を喪失した国の人達に提供する物品・金銭等と思うが、左に非ず、財団法人の定款の正式な用語なのである。

法人をわけて、会社組織のような人を中

心に集合した社団法人と、財産を中心にして結合した財団法人とがある。前者の憲法的存在の取り極めを「定款」と称し、後者のそれを「寄附行為」と称するのである。法律の習いたての頃は、なんとも理解しがたく、閉口したものである。

今は、法律も卒業したから、極わだって不都合とも感じないし、寄附行為は財団法人の憲法的存在とはっきり理解しているので、さして不便とは感じないが、おかしい用語の一つであることには変りがない。